

東京帝國大學
學文學部
史料編纂所編纂

大日本史料

第十二編
之二十九

東京帝國大學藏版

元和四年五月十一日

候、組六十七石之内ニ候也、

元和四年六月十三日

速見安藝守

木村越前守

速見長門守

山科首總
ノ歸京
兼勝實條
等ノ歸京

百石大外記、百石官務、六拾石行事官、六拾石左官掌兩人、三十石右官掌、六
十石召使、九十石副使三人、六十石掃部寮、以上、

六位史英芳、主殿筑前、右官掌來、行事官依所勞不來、名代來、

〔言緒卿記〕五月十二日、庚子、天晴、

一圓若狹從江戸上洛之由申、指楯持參了、

廿二日、庚戌、天晴、

一言總從江戸上洛了、

〔義演准后日記〕二十 五月廿二日、兩傳奏上洛云々、

〔土御門泰重卿記〕二 五月廿二日、庚戌、晴、昨日傳奏上洛之由承及候、今朝

見廻門前まで參候、坊城、櫛笥被參候、

十一日、幕府、出羽米澤城主上杉景勝ニ暇ヲ給フ、尋テ、景勝、江戸ヲ發シ、

元和四年

五月

十六日

國ニ歸ル、

〔上杉年譜〕四十九 景勝二十九 同年夏五月十一日、公歸城ノ官暇ヲ賜ヒ、同十五

日、江戸府ヲ發シ、同二十二日、米府ニ御著城アリ、和上杉家譜、景勝ノ歸國

辭所見 ナシ

十六日、幕府、伯耆米子ノ町人村川市兵衛、大谷甚吉ニ竹島渡海ヲ許ス、

〔大谷氏舊記〕二 伯耆

以上

從伯耆國米子、竹嶋々先年舟相渡之由候、然者如其今度致渡海度之段、米子
町人村川市兵衛、大屋甚吉申上付而、遂上聞候之處、不可有異儀之旨被仰出
候之間、被得其意、渡海之儀可被仰付候、恐々謹言、

永井信濃守

尙政在判

井上主計頭

正就同

土井大炊頭

幕府池田
幸命ヲシ
テ命ヲシ
ヘシム

元和四年五月十六日

元和四年五月十六日

三四四

利勝在判

酒井雅樂頭

忠世同

村川市兵衛大屋甚正
之阿倍正
之阿倍正
請テ幕府ニキ

獨證御目
見時服頂
戴時服頂
奏紋ノ船
許可セラフ

松平新太郎殿人々御中

〔別村川氏舊記〕

○竹島渡海山來記抜書控

三代

正純 松平新太郎様因幡伯耆

御領知之刻、元和三年、御仕置之爲御上使阿部四郎五郎様御越之砌、村川市

兵衛、大屋甚吉竹島渡海之儀御注進申上、翌元和四年、兩人江府に罷下り、阿

部四郎五郎様御取持、我等御由緒之義を以、竹島渡海御免之義奉御訴訟仕

候所、右先祖之者御由緒筋御糺と相成候上、同五月十六日、達上聞、則松平新

太郎様迄以御奉書、竹島渡海之儀不可有異儀之旨被爲仰附、右御奉書市兵

衛、甚吉奉頂戴仕、則御奉書如左、○中略、大谷氏舊記

右御由緒後被爲在候に付、台徳院様は獨禮御目見被爲仰附、御紋之御時

服頂戴、并に竹島渡海之船御紋之御船印、御紋之御幕、道中御紋之御差札、

御紋之御挑灯、御鎖御手銚御鐵炮蒙御許容、御公邊御老中、御若年寄、寺社

御奉行様方首尾能相勸罷歸、引續例歳江府に參勤奉仕候、○下

○朝鮮東萊府使尹守謙、書ヲ宗義智ニ贈リテ、磯竹島ノ鬱陵島ナルヲ
辨證スルコト、慶長十九年七月是月ノ條ニ、幕府、竹島渡海ヲ禁止スル
コト、元祿九年正月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔別大谷氏舊記〕

○伯耆過去帳

大谷玄番實眞

法名 松柏院實庭源眞大禪定門 元和貳年辰八月廿七日
瑞英院明安妙光大禪定尼 同年同月廿日

右實眞、但馬國大谷々ヨリ伯州會見郡小鷹城主ノ召ニ因テ勤仕ス、于時杉
原家宗領短命ニ卒、嫡男幼年ニテ、末家ナレトモ、同苗播磨守勇名有之故、吉
川元春依吹擧、則家督相續ト成ル、實眞補佐シ、盛重公勇將ナル故、威風關東
西獨歩ス、惜カナ、程ナク盛重公卒去、尤男子二人有之、跡目論ヨリ更起、終杉
原家滅亡ス、濫觴ハ同役何某因謀叛ナリ、則玄番實眞八幡社傍ニテ討果、其
身モ討死致ニライテハ、杉原家再建無覺東、依テ亂軍打破リ、再但州大屋谷
塾居、于時杉原血脈殆絶タリ、誠武運ツタナキ我々、ナマチイ企致、先祖ヲケ

元和四年五月十六日

三四五

廻船
大行甚吉
竹島ニ漂
流シ海
起ス

甚吉竹島
スニテ
病死

カサンヨリハト、一族再武ノ思殆絶タリ、依テ玄番ニ幼童兩人有、甥甚吉二
兒守護サセ、伯名同國米子引越居住ス、實眞ハ大屋谷蟄居シ、元和貳年八月廿七
日卒、法名松柏院ト號ス、則高野山地寶院其牌有テ、日牌寄附之旨、其頃家富
ルト雖モ、家業無之難叶、右甚吉廻船ヲ業トス、于時元和初ノ頃、越後國ヨリ
歸帆之砌、風ニテ竹島エ漂流、暫ク全島巡見處、朝鮮國去ル夏四五十里、賊人
家モナク、空□^①之島、産物有之故、海上里數相考、湊山下歸帆、折柄、因伯御太守
新太郎公御幼稚ニテ、爲御城代安部（安部四郎五郎公御越之砌ニテ、早東御注進
申上ル所、則甚吉江府江御召、元和四年竹嶋渡海御免御奉書下リ、難有渡海
致ス之所、元祿九年御制禁、右濫觴ハ在、別記故略之、全竹島渡海開基ハ甚吉
ナリ、年經テ竹島ニテ病死、則彼島在石碑、法名淨本ト號ス、後チ竹島院ト贈
號ス、世代同様不可怠供養ヲ、于時實眞二人童子成人、宗領九右衛門勝宗、二
男兵左衛門、號兵左、隣町爲致別家者也、
大谷九右衛門尉勝宗 行年九十七歳ニテ卒、

寛文貳年壬寅十二月廿一日卒、

法名 竹有院旨翁宗玄庵主

隱居名別
遺存ト號

大谷九右
衛門甚吉
竹嶋渡海
ノ出
願
セシム

村川市兵
衛ノ參加

甚吉ノ死
後九右衛
門亦業ヲ
細察ス

於米府大谷家ノ元祖是也、于時竹島渡海ノ開基、予カ先祖ナリ、時ニ村川市
兵衛相加ユル濫觴ハ、甥甚吉竹島ニ漂著、數日滯留シ、全島巡見之所、人家更
無シ、尤數多所務有之故、湊山下ニ歸帆シ、同性勝宗ニ具ニ相達所、勝宗未隱
士タリシ時故、則甚吉名前ニテ、竹島致渡海度之旨御訴訟申上、頃ハ元和年
中、新太郎少將御幼君（御幼君）テ、爲御城代安部四郎五郎公米府ニ御越之砌、勝宗故
有時々任公（任公）ス、時ニ村河市兵衛モ安部公ニ由緒有之、右竹島渡海相加度之
旨、則安部公御取持ニテ、市兵衛連名シテ及出願、尤安部公御歸國之砌、市兵
衛、甚吉兩人御召連、則江府相詰、御訴訟申上、則御老中ヨリ、因伯御太守新太
郎君御名宛、竹島渡海不可有異儀之旨御奉書相下、則甚吉開基ニ附、右之御
奉書奉頂戴、渡海中乎前（乎前）所持致、全於戰場一國ヲ伐隨タルモ同様、誠空居ノ
嶋見顯ハシ、日本ノ土地ヲ廣メ、御式帳（御式帳）ル之段、拔群之可爲功之旨、因茲兩
人共九年振リニ一人宛參勤之獨禮御目見、御紋御時服御尉斗（御尉斗）拜渡海之
船エハ、御紋之船印等拜領、具ハ別記ニ有、于時勝宗未再武之志有之故、發願
ヨリ甥之名前差出之所、惜カナ甚吉於竹嶋病死ス、故無據九右衛門自身之
名前ニテ諸夏相勤、尤甚吉部屋住ノ夏、コトニ年來商賣休業ス、村川儀ハ年

元和四年五月十六日

三四八

江戸城竹
築ノ時
島ノ梅
ヲ獻ズ

長コニ本姓ヲ名乗浪人立居申故、初筆戴御訴訟申上ル故、則渡海御免御奉書ニモ、村川市兵衛、大屋甚吉ト有之云々、尤勝宗名前於差出テハ、當家竹島開基ト云筆下ニ可附筋雖無之、民家下リ、今更聊之キ無益支、因テ本姓ハ勿論、中古ヨリノ大谷迄モ秘シ、甚吉同様、大屋九右衛門ニテ、繼目ノ御目見申上也、末世子孫迷トモ可成筋ユエ、爲心得豫メ書戴置者也、于時西御本丸御建立之砌、竹嶋柚檀等御用木獻上、至今御書院悉竹島柚檀ト云々、右御用木爲獻上、兩人共參府、則首尾能御目見申上、則御用木御紋之差札、至今所持致スナリ、右御用相勤頃ハ、寛永十五年二月、大猷院様御代之御支也、附タリ、御書院床之板并ニ御書棚之板、至于今竹島梅檀云々、

竹島渡海發願之時、道喜未再武、所存有之故、其身名前不出、甥甚吉願主ト成ル、○下

〔村川氏舊記〕者○伯

五月十一日之御飛札十月七日ニ參著、具ニ披見、并出雲紙拾束贈給、遠路御志之程、別而令満足候、然者竹嶋へ渡海之儀、當年者延引之由、尤ニ存候、如來意小嶋之儀ニ候間、年を隔被相渡可然候、將又當年御上落も候ハ、出京候

竹島へ渡
海ノ延引

而御禮可被申上處ニ、左無之ニ付而私慮之由、無餘儀儀共ニ候、來年於御上落者、被罷上、御年寄中被懸御目候儀、外實共肝要之至ニ候、事々期後慶之時候、恐々謹言、

安倍四郎五郎

(年代未詳)
十月七日

正之花押)

村川市兵衛殿

大谷惣左衛門殿 御返事

猶々、近年嶋之所務後不足之由、不勝手ニ可有之与笑止候、九右衛門物語ニ而令承知候、委細九右衛門ニ後申談候、以上、

大屋九右衛門方參府付而芳札披見、殊更下緒大小贈給之、欣然之至候、御手前彌御無事之由珍重候、當年其方船竹嶋へ渡海無滯歸朝之由、一段之事候、併近年所務後不足之旨、家來庄左衛門之狀披見、九右衛門物語後令承知候、隨而我等儀も無恙在之候、委曲家來庄左衛門方申達候、猶又九右衛門方可爲演說候、恐々謹言、

竹島ノ所
務不足

元和四年五月十六日

三四九

元和四年五月十六日

三五〇

阿倍四郎五郎

政重(花押)

八月廿二日

村川市兵衛様御宿所

〔大谷氏舊記〕〇伯耆

覺

一私共竹嶋の渡海仕候儀ハ、松平新太郎様因幡伯耆御領知之時分、元和三年、伯耆國御仕置之爲御使、阿倍四郎五郎様御越被成候時分、私共親御訴訟申上、翌年御江戸の相詰御詮議之上、新太郎様の御奉書被遣之、則共御奉書新太郎様ハ私共親頂戴、代々所持仕候、夫ハ隔年ニ兩人ニ而渡海仕候、〇中

延寶九年

伯耆國米子町人

酉ノ七月十日

村川市兵衛

右ハ延寶九年酉ノとし、市兵衛罷越候刻、寺社御奉行様へ書上申覺也、
〔別本大谷氏舊記〕〇伯耆竹嶋の渡海之次第先規ハ書付之寫 伯耆國漂流人

口書之覺

竹嶋ノ産物

FO略上

〔大谷氏舊記〕〇伯耆

〔延寶九年酉ノ歲ニ御座候見據御宿申上候覺竹嶋之様子御尋被成候ニ付、此一通山中候一

一大猷院様御代、五十年前以前、阿部四郎五郎様御取持を以、竹嶋拜領仕、其上親共ハ御目見え迄被爲仰付、難有奉存候御事、

一彼嶋の年々船渡海、ミチ之魚之油并串鮑之所務仕申候御事、

一竹嶋の隠岐國嶋後福浦ハ海路百里餘も可有御座由、海上之儀ニ御座候

へハ、慥ニ知レ不申候御事、

一竹嶋之廻リ拾里餘御座候御事、

一殿有院様御代、竹嶋之道筋ニ貳十町計廻リ申小嶋御座候草木無御座

岩山ニ而御座候、廿四五年以前、阿部四郎五郎様御取持を以拜領、船渡海

仕候、此小嶋ニ而後ミチ之魚之油少宛所務仕候、右之小嶋の隠岐國嶋後

福浦ハ、海上六十里餘後御座候御事、

元和四年五月十六日

三五二

竹嶋ニテノ所務
隱岐ヨリ竹嶋マデノ距離
竹嶋ノ周
竹嶋附近
發見ス

元和四年五月十六日

五月十三日

〔大谷氏舊記〕〇三伯者

竹嶋草木之覺

竹島所産ノ動植物

- 一 五葉松 大分
- 一 とがノ木 同
- 右二色ハ山深く、難所ニ而、出シ申事不成、
- 一 せんだん 大分
- 一 だいとら 同〇村川氏舊記、い
- 一 木更ど 同
- 一 檜 同
- 一 樅 少
- 一 竹 大分
- 一 吉野竹 少
- 一 野人參 大分
- 一 人よく 同

- 一 ふき 少
- 一 めうが 同
- 一 うど 同
- 一 ゆり 同
- 一 青木ど 大分
- 一 ぐミ 少
- 一 いちご 同
- 一 いたどり 同
- 鳥けた物
- 一 穴鳥 大分
- 一 せせ 同し
- 一 山から
- 一 せつめ
- 一 ひり
- 一 うへらひり

元和四年五月十六日

- 一 四十よから
- 一 かか□かめ
- 一 うの鳥
- 一 ちちごちちご ○村川氏むらがわ 舊ふる 肥ひ
- 一 つどめ
- 一 鉢子
- 一 鉢つと
- 一 むぐで
- 魚之類
- 一 鮑
- 一 目張
- 一 をり
- 一 あかあかから
- 一 くく鯛

〔別本村川氏舊記〕

○國御屋くにのみや 飾先規かざりさき 御節披みせのひら 之趣并諸家古御書之寫

竹島渡海ノ際田ノ家ヨリノ注文品

一 御入國已來、尤私共祖父之者迄、例歲竹島渡海仕候節、鳥府（鳥府）御用之趣以、御注文被仰付候所之御書付、并御用之品々被召上候節、御小目錄被成御渡候、ケ様之類も、餘夥所持仕候處、及紛失申候、尤相殘候御書附之寫如左、

覺

- 串鮑 一上々串鮑 五千貝
- 串鮑 一上串鮑 三千貝
- 串鮑 一中串鮑 貳千五百貝
- 丸干 一上々丸干 三千六百貝
- 丸干 一上丸干 三千貝
- 腸漬鮑 一腸漬鮑 貳百貝
- 鮑腸鹽辛 一鮑腸鹽辛 壹斗五升
- 木耳 一木耳 貳斗

右之品々、

殿様御用也、

正月十一日

牧野清左衛門

元和四年五月十六日

村川市兵衛殿

竹嶋串鮑目錄

- 一上々串鮑 拾五連
- 一上串鮑 拾五連
- 一上丸串鮑 三百貝
- 一中串鮑 七拾連
- 一下串鮑 三百貝
- 一腸濱鮑 壹斗
- 一木くらげ 五升

右者、

大殿様御用候、以上、

正月廿九日

村川市兵衛殿

牧野清左衛門

覺

- 一中々串鮑 三拾連
- 一中丸干 五百貝
- 一下丸干 貳百貝
- 一腸濱鮑 百貝
- 一腸鹽辛 八升

右之通、

壹州様御用ニ候、

正月廿五日

村川市兵衛殿

牧野清左衛門

覺

- 一上々串鮑貳拾三連 内五連市兵衛江戶土産に被遣
- 一上ノ串鮑百連 内貳拾五連は此市兵衛へ被遣候
- 一中ノ串鮑百拾連 内三拾連は此市兵衛へ被遣候

元和四年五月十六日

元和四年五月十六日

三五八

一下ノ串鮑百拾連 内 九拾貳連は市兵衛へ被遣候、
八連は此方へ被召上候、

一下々同百參拾八連ハ不殘市兵衛へ被遣候、

右串鮑都合四百八拾壹連
上々、上、中、下、合貳百七拾壹連ハ此方へ被召上候、

内 上々、上、中、下々、合貳百拾連ハ市兵衛へ被遣候、

桐ノ木

一 桐ノ木拾本ノ内

太キ能木三本被召上候、
殘る七本は市兵衛へ被遣候、

油木海月

一 油木海月

此方御用無之候、

一 上々串鮑直段壹連ニ付 丁銀七匁宛、

一 上同 直段壹連ニ付 同五匁九分宛、

一 中同 直段壹連ニ付 同四匁二分宛、

一 下 直段壹連ニ付 同三匁壹分宛、

右之直段ニ被召上候間、左様可被仰渡候、

一 桐ノ木 直段付無御座候、拾本之内太キ能木三本直段可被仰下候、以上、

寛文四年六月十八日

山住源右衛門印形

宮田吉左衛門印形

竹島松島
渡海ア村島
川大谷兩
所寄合ナ
ス務トナ

右之通御座候、

〔大谷氏舊記〕

〇二 伯耆

取替シ申一札之事

一 當暮々、竹嶋、松嶋、自今以後寄合之所務ニ仕候、然上ハ此儀ニ付、縦損亡在
之候ても、利分在之候ても、兩人割府仕、右之算用少々無相違可致事、

一 兩嶋歸帆船、所務之品々、少々而も無偽明白ニ可申相事、

一 兩嶋仕出之算用是又互ニ少々而も隱偽申間敷事、

右如一札之、子共之代ニ至迄、兩嶋寄合ニ仕候、然上ハ互無延慮致相談、嶋仕
出シ入目、互疑無之様ニ可仕候、尤損亡又ハ利分在之候節ハ、猶以兩人割荷
無相違様ニ堅算用可申事、仍テ爲後々年之一札如件、

天和元年

酉ノ十二月廿三日

村川市兵衛

黒印

元和四年五月十六日

三五九

大屋 九右衛門殿

〔隱州視聽合記〕 一 國代記

隱州在海中、故隱岐嶋（上）、按（後）、則海中（中）、其在巽地言嶋前也、知夫郡屬焉、其位靈（靈）、地言嶋後也、周吉郡、穩地郡屬焉、其府者周吉郡南岸西鄉豐崎也、從是南至雲州美穂關三十五里、辰巳至伯州赤崎浦四十里、未申至石州溫泉津五十八里、自子至卯無可往地、戌亥間行二日一夜有松嶋、又一日程有竹嶋、（俗）、竹嶋、此二嶋無人之地、見高麗如自雲州望隱州、然則日本之乾、以此州爲限矣、（略）、（下）

竹嶋ノ一
名ヲ隱フ
島ト附フ

二十一日、（己）、二條昭實、鷹司信房、江戸ニ之ク、

〔義演准后日記〕 二十 五月廿一日、晴、二條殿下、鷹司太閤兩所御同道、江戸

御下向、松本邊マテ送侍進之、

廿五日、大夕立、二條殿下岡崎邊可有御通歟、今日終日曇、心易而已、（略）、（二條家）

所談諸家傳
所見ナシ、

〔附錄〕

〔義演准后日記〕 二十 六月九日、二條殿下御留主見舞、樽五荷、強飯二荷、瓜

二籠進之、鷹司へ三荷兩種進之、

義演昭實
信房ノ留
守ヲ助フ

廿七日、二條殿御留主爲見廻、繡進上、鷹司殿同桃進上、

二十四日、（壬）、陸奥仙臺城主伊達政宗、秀忠ニ、鶴、海鼠腸等ヲ獻ズ、

〔伊達山治家記録〕 七十 五月廿四日、壬子、御献上トシテ、巢鶴二雙、兄鶴二

雙、并ニ海鼠腸三十枚、江戸へ差登セララル、因テ土井大炊助殿利勝、本多上野介殿へ、各御書ヲ以テ、海鼠腸十五枚宛進セララル、

○伊達政宗、物ヲ秀忠、家光ニ獻ジ、マタ土井利勝、本多正純等ニ贈遺ス
ルコト、本年中ニカ、ルモノ、便宜左ニ合致ス、

〔伊達山治家記録〕 七十 六月廿日、丁丑、公方へ繡三十袋、御臺所へ同二十

袋献上シ玉フ、土井大炊助殿、本多上野介殿へ、各御書ヲ以テ、繡二十袋充進セララル、藤堂和泉守高虎朝臣、伊丹喜之助殿、康勝、細川玄蕃殿、興昌、棚倉侍從殿宗茂、（立）、（左）、妻木玄蕃殿へ、繡二十袋充、柳生又右衛門殿宗矩へ、同十袋、各御書ヲ以テ進セララル、

七月十二日、戊戌、天氣好、晚少曇、鯉腸作一桶、卷海鼠腸一桶、并ニ長青蓼漬一桶、御献上、因テ土井大炊助殿へ、御書ヲ以テ、鯉腸作、長青蓼漬、各一桶進セララル、

鯉腸作
卷海鼠腸
長青蓼漬

CONTENTS.

	PAGE
I. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	1
II. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	1
III. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	3
IV. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	3
V. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	4
VI. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	4
VII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	4
VIII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	5
IX. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	5
X. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	5
XI. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	44
XII. E. H. Blair and J. A. Robertson, The Philippine Islands. Volume XVIII.	45
XIII. Letter from the Governor-General of the Dutch East Indies to the Directors of the United East India Company. Japara. January 14, 1619.	46
XIV. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	46
XV. E. H. Blair and J. A. Robertson, The Philippine Islands. Volume XVIII.	47
XVI. Letter from J. P. Coen to the Directors of the United East India Company. Bantam. December 18, 1617.	48
XVII. Lettere Annve del Giapone, China, Goa, et Ethiopia degli anni 1615, 1616, 1617, 1618, 1619. Letter from Father Francesco Eugenio to Mutio Vitelleschi, the Father General of the Company of Jesus. Macao. January 21, 1619.	49
XVIII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	53
XIX. Lettere Annve del Giapone, China, Goa, et Ethiopia degli anni 1615, 1616, 1617, 1618, 1619. Relatione d'alcune altre cose notabili occorse nel Giapone.....	54
XX. E. H. Blair and J. A. Robertson, The Philippine Islands. Volume XVIII.	56
XXI. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	58
XXII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	58
XXIII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	59

昭和四年十二月二十六日印刷

昭和四年十二月二十八日發行

(大日本史料第十二編之二十九頁付)

豫約價金七圓

編輯者兼
發行者

東京帝國大學

印刷者

黎明堂 岩井龜次郎

東京市神田區小川町一番地

著作
所有

發行所

東京帝國大學
文學部
史料編纂所

(電話小石川(85)七〇二三番)